



18禁乙女ゲームの

淫乱悪役令嬢に転生して

塩対応した結果、

攻略対象が全員ヤンデレ化しました。

『**18**禁乙女ゲームの淫乱悪役令嬢に転生して塩対応した結果、

攻略対象が全員ヤンデレ化しました。』

第1章…断罪回避の果て、わたしは執愛の檻に堕ちる

◇もくじ◇

- 【1. 甘美なる地獄の幕開け】
- 【2. 十歳の覚醒と「首チョンパ」の恐怖】
- 【3. 追憶の蕾（つぼみ）——肉体の開花と、歪み始めた恋執】
- 【4. ヒロインの登場、物語のはじまり】
- 【5. 「鉄壁の淑女」という名の誘惑】
- 【6. 家庭教師カリスト——蜜の残り香と机下の攻防】
- 【7. 双子の画家——聖母のデッサン、剥がされる仮面】
- 【8. シリウス王子——絶望のアシスト】
- 【9. 聖女の毒白——引き裂かれた初恋と、偽りの祝福】

第1章…断罪回避の果て、わたしは執愛の檻に堕ちる

【1. 甘美なる地獄の幕開け】

とつぷりと暮れた闇夜の寝室に、月だけが明るく肢体を映し出す。

「あ、はあっ……！ あ、あああっ、いや……いやですわっ、あああああっ!!」

豪華な天蓋付きベッドのなか、わたしの叫びは、重なり合う肉体とシーツが擦れる音にかき消されていった。

視界がちかちかと点滅し、火花が散る。

脳の芯まで痺れるような熱い感覚が、脊髄を駆け上がって指先までを震わせる。

何度目かの熱い奔流が脳を白く明滅させ、わたしはシーツを掴んだまま大きく背を反らせた。

全身の力が抜け、ぐったりと沈み込むわたしの耳元で、低く甘い声が囁かれる。

「……また、果てたのか。本当に、感じやすい身体だ……リリーナ」

シリウス・アルマ・デ・ラ・ヴァリエール。

この国の第一王子であり、透き通るような銀髪と、氷のように美しい空色の瞳を持つ男。

普段は鉄面皮で、社交界では「氷壁の王子」と渾名される彼が、今は獣のような荒い吐息を私の耳に吹きかけている。

「……ふっ、く……リリーナ、いい加減に認めろ。君のその身体は、私の与える快楽をこれほどまで欲しがっている」

「……ち、が……ちが、いますわ……っ、わたくし、は……」

喉が枯れ、まともな声が出ない。

必死に否定しようとしても彼は意地悪くわたしの敏感な場所を逃さずに突き上げてくる。

そのたびに、わたしの思考は真つ白な霧に包まれ、「嬉しい」という本能的な反応が、「いやです」という淑女の理性をズタズタに引き裂いていくのです。

—おかしいですわ……。

絶対に、何かがおかしいですわ！

わたし、リリーナ・フォン・ロシュフォールは、今朝まで間違いなく清らかな処女でした。

この、峰不二子ばりに豊満すぎて歩くだけで視線を集めてしまう忌々しいバストも、なだらかな曲線を描くキュツと締まったウエストも、男を誘惑するためにある

ような肉感的なお尻も、――すべては「前世でプレイしたはずの、⑱禁乙女ゲームのキャラクターデザイン」のせいです。

わたしはこの十七年間、この呪われた「爆美女ボディ」を最大限に隠し、貞操を守り、慎み深く生きてきたはずなのに！

はらはらと、この理由も分からない突然の展開に頭が追い付かず、涙が零れ落ちる。

「なぜ泣く？　ずっとその熱っぽい瞳で誘っていたのは君の方ではないか」

「……そんな、こと……っ、した覚えは……っ、ああんっ！」

反論は許さないとばかりに胸の先端を引っ張りあげられ、甘い痺れが体をくねらせる。

シリウス殿下の低い笑い声が胸に響く。

彼は私の顎を力強く掬い上げ、無理やり視線を合わせた。

そこにあるのは、冷徹な氷の瞳ではなく、どろりと溶けた、底なしの情欲と独占欲。

「君はいつだってそうだ。私の前で、他の女を勧め、私には興味がないと言わんばかりに冷たくあしらう。……それがどれほど私を苛立たせ、そして、欲情させたか分かっているのか？」

「……え……？」

「他の女に興味を持てと言うたびに、君のそのぷっくりとしたふしだらな唇を塞いでやりたいと思っていた。君が他の男の視線を平然と受け流すたびに、その男たちの目を抉り、君を誰の目にも触れない場所へ閉じ込めたいと……そう願っていたんだよ」

殿下の言葉一つ一つが、恐ろしいほどの重量感を持ってわたしの胸に突き刺さる。

誘っていた……？

わたしが、殿下を……？

「その愛らしい顔に似合わない下品な肉体を……こうしたいとずっと……。このこぼれちそうなほどの乳……肉付きの良い尻……、一体どれだけの男を勃起させてきたのだ？
そなたは……魔性だ」

「ひっ……」

急に王子殿下の整った顔が近付いてきたかと思うと、舌を絡ませ、深く、深く口づけを交わされ唾液を飲まされる。

愛しいと……少なからず小さな愛情と憧れを抱いていた相手……。

想像していたよりもずっと厚い胸板に陶醉する。

気持ち良すぎて狂いそうになりながらも必死で理性をつなぎ留める。

——冗談ではありませんわ！

わたしはただ、死にたくなっただけですよ！

この世界は、前世でわたしがやり込んだ⑮禁乙女ゲーム『溺れる愛と薔薇の棘』の世界。

そして悪役令嬢リリーナは、幼馴染でもあったシリウス王子に執着していた。

会うたびに爆乳で彼の腕を挟み込み、極上の笑顔を作ってしなだれかかる。

そんな努力も空しくシリウス王子はリリーナを『淫乱だ』と相手にせず、転校生のヒロイン、癒しの力を持つ聖女ミリアを愛するようになるのだ。

いつしかリリーナは誘われるがまま性に奔放になり、自らの肉体を使って男たちを操るようになる。

そして王子と仲の良いヒロイン・ミリアをいじめ、王子の友人たちを色香でたぶらかし…彼を泥酔させ寝室に侵入、まんまと王子と情を交わし妊娠するが…別の男の子種であったことが発覚し——断罪される。

「他人の子を王座に据えようとした罪」でギロチンにかけられる淫乱悪役令嬢。

その運命（デッドエンド）を回避するために、わたしは血の滲むような、それはそれは涙ぐましい努力を重ねてきた。

淫らな悪女に見られないよう、露出の多い服装は避け、男性の多いパーティーには参加せず、夜会でも壁の花に徹し、殿下が近づいてくればヒロインである聖女ミリア様をこれでもかと差し出した。

前世の最推しである…シリウス様を諦めたとしても、彼が幸せならばそれで良いと……。

なのに、なぜ……。

どうして、監禁されて、身も心もバラバラにされるほど貪られているのですの…

…？

「……ああ、その顔だ。理解できないというような、その無垢な瞳……。その瞳で、私を狂わせた責任を、今夜はたつぷりと取ってもらおうぞ」

太ももに這わせた彼の大きな手が、その指が、柔肉に食い込む。

体重を押し込むようにして、再び殿下の熱い塊が容赦なく私を貫いた。

「あぁっ！……は、あ……っ、し、……シリウス、さぁぁっ……！」

名前を呼んだほんの一瞬、彼の瞳が揺らぐ、理性と情欲の狭間。

それが合図だったかのように、愛の蹂躪はさらに速度を増していく。

わたしは意識を失いそうになりながら、どうしてこうなったのか……。どこでボタンを掛け違えたのかを、必死に思い出そうとするのでした。

【2. 十歳の覚醒と「首チョンパ」の恐怖】

すべてが始まったのは、わたしが十歳の時。

別宮の庭園で、飛んできた蝶を追いかけて転んだ拍子に石に頭をぶつけたのです。

その瞬間、わたしの脳内に、濁流のような「前世」の記憶が流れ込んできた。

（えっ……ここ、わたしがプレイしてた乙女ゲームの世界じゃない……！？）

目の前に広がる美しいバラ園。

豪華なドレス。

そして、ガラスに映った自分。

十歳にして、すでに将来の「爆美女」を約束された、整いすぎた顔立ち。

わたしは思い出しました。

この体……リリーナという令嬢が、いかに悲惨な末路をたどるかを。

ゲーム内での彼女は、まさに「歩く淫乱」でした。

シリウス王子と結婚したいがため、王子の側近である騎士ベルナードを誘惑し、家庭教師のカリストに股を開き、双子の画家の「モデル」と称して3人で淫らな行為に耽る。

そして、あろうことが誰とも知れぬ男の子種で妊娠し、それを王子の子だと偽って……。

リリーナに惚れ込んでいた男の密告によって逮捕され……地下牢に収監。

（……首が飛ぶ。ギロチンで、わたしの綺麗な首が、シュパアアン！ って飛ぶんですわ！）

十歳のわたしは庭園でガタガタと震え上がりました。

絶対に嫌ですわ。

今世では、美味しいものを食べて、お洒落をして、あわよくば真面目な旦那様を見つけて、畳の上で（この世界に畳はありませんが）大往生したい！

そのためにはゲームのシナリオを全力でぶち壊さなければなりません。

キーワードは「清廉」「潔白」「鉄壁」。

リリーナの持ち味である「エロス」を、一滴たりとも世に出してはいけないうす。

考え込んでいたその時、

「リリーナー！」

背後からわたしを呼ぶ幼い声に振りかえると、銀髪の美少年が駆け足で、陽だまりの中をこちらに走ってきていました。

「し、シリウス殿下…」

「リリー、どこ行っちゃったのって、みんな探してたよ、お城に戻ってかくれんぼしよう！」

（か、かわいい……）

思わず、心の声が漏れそうになりました。

前世でプレイした乙女ゲームの攻略対象、冷徹な独占欲の塊であるはずの「推し」の少年時代は、少年でもやっぱり、息を呑むほどの美形だったのです。

ぷっくりとした頬、きらきらと輝くアイスブルー色の瞳、そして無邪気にわたしを求めるその仕草。

まじまじと顔を見つめていると、王子はわたしの視線に気づいたのか、顔をうつすら赤くさせてわたしの小さな手をぎゅっと握り、「さあ！」と促しました。

まだ小さくて柔らかい、けれど確かな温もり。